

2014.10.18

“死”を題名・テーマにした名曲を聴く

プログラム

今日は“死”の音楽を特集します。“死”という題名の付いた名曲、テーマにした名曲を集めてお聴きいただきます。「フリーメイソンのための葬送音楽」はモーツァルトが加入していた秘密結社二人の会員の逝去を追悼するための曲ですが、グレゴリオ聖歌風の定旋律を用いた沈痛な響きと厳粛さを持った名曲。ブラームスのドイツ・レクイエムは恩師シューマンの死に刺激を受け着手、さらにブラームスの母の死が完成を急がせたと言われています。教会用の音楽ではなく、ドイツ語のテキストを用いた純ドイツ的な演奏会用のレクイエムの名作です。シューベルトの弦楽四重奏曲「死と乙女」の題名は、死を拒否する病床の乙女と死を宣告する死神との対話を描いた歌曲「死と乙女」の主題が第2楽章に用いられているためですが、美しい第2楽章の他、緊張感溢れる第1楽章、澆漓とした生命力を持った第4楽章など、充実した内容を持った傑作です。サン＝サーンスの「死の舞踏」はフランスの詩人アンリ・カザリスの怪奇な詩によっています。骸骨の踊りが次第に激しさを増して行くと、夜明けを告げる鶏の鳴き声が響き渡り、再び墓場に逃げ帰り、静けさを取り戻すまでを巧みなオーケストレーションで描いた名曲です。リストの「死の舞踏」はグレゴリオ聖歌の『怒りの日』の定旋律を用いた変奏曲で、リスト一流の巧緻な管弦楽とピアノが絡み合ったドラマティックな秀曲。グリーグとプロコフィエフの名曲も合わせてお楽しみください。

ヴォルフガング・アマテウス・モーツァルト (1756~1791):

フリーメイソンのための葬送音楽K.477

アンドレ・プレヴィン指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

(1992.10.18 ウィーン・ムジークフェラインサールでのLive ~ 7月に亡くなった名コンサートマスター ~
ゲルハルト・ハッツェルの追悼演奏)

エドヴァルド・グリーグ (1843~1907):

組曲“ペール・ギュント”第1組曲op.46 ~ オーゼの死

ヘルベルト・ブロムシュテット指揮NHK交響楽団

(1990.4.6 NHKホールでのLive)

セルゲイ・プロコフィエフ (1891~1953):

バレエ音楽“ロメオとジュリエット”op.64 ~ タイボルトの死

セルジウ・チエリビダツケ指揮ロンドン交響楽団

(1980.4.18 NHKホールでのLive)

ヨハネス・ブラームス (1833~1897):

ドイツ・レクイエムop.45 ~ 抜粋

エディット・マティス (ソプラノ) / アンドレアス・シュミット (バリトン)

アンタル・ドラティ指揮ベルリン放送交響楽団

(1986.11.15 ドイツ、グローサーセンテ・サールでのLive)

*** 休憩 ***

フランツ・シューベルト (1797~1828):

弦楽四重奏曲第14番ニ短調D.810“死と乙女” ~ 第1楽章、第2楽章、第4楽章から

アルバン・ベルク弦楽四重奏団

(1993.11.19 サントリーホールでのLive)

カミーユ・サン＝サーンス (1835~1921):

交響詩“死の舞踏”op.40

ダニエル・バレンボイム指揮パリ管弦楽団

(1980.10録音 グラモフォン盤)

フランツ・リスト (1811~1886):

ピアノと管弦楽のための“死の舞踏”

シューラ・チエルカスキー (ピアノ)

ミラン・ホルヴァート指揮オーストリア放送交響楽団

(1972.5.30 ウィーン・ムジークフェラインサールでのLive)